

# Ladder

平成22年6月14日 第7号

北海道教育庁学校教育局

参事（生徒指導・学校安全）

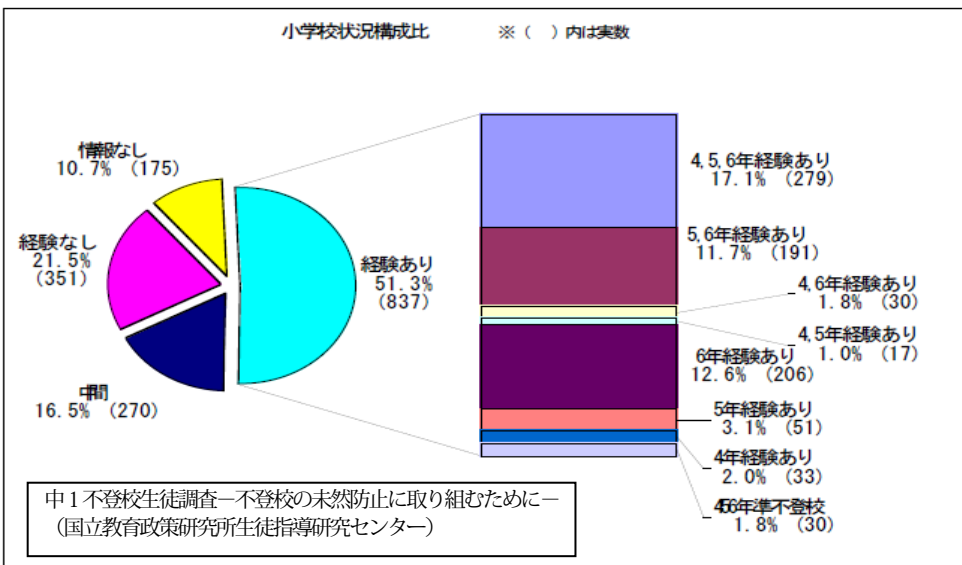
中1ギャップ・高1クライシスを解消するために

Q 中学校1年生の不登校の未然防止には、どのようなことに留意するとよいのですか。

中学1年生で不登校となった生徒の約半分は、既に小学校時代に何らかの形で学校を休みがちであった児童であることが明らかとなっています。

中学校における不登校を未然防止するためには、小学校時代に学校を休みがちであった生徒を、中学校の教職員がしっかりと把握し、不登校の兆候が現れ始めたら、早期に適切な対応ができるよう、準備を整えておく必要があります。

そのため、中学校においては、小学校と十分に情報交換を行い、生徒の小学校時の欠席状況を把握しておくことが重要です。



左図に示した通り、中学校に入学して初めて不登校になった（小学校時には、ほとんど兆候が見られなかった）と判断される事例（「経験なし」群）は、中学1年時の不登校生徒の2割強（21.5%）を占めるにすぎない。全体の半数強（51.3%）は小学校時の「経験あり」群であり、ややその傾向が見られる事例（「中間」群）まで含めれば、中学1年時の不登校生徒の3分の2は、小学校時にさかのぼって原因等を考える必要があることが分かる。

また、この「経験あり」群の内訳を見てみると、

小学校4年時から6年時まで3年間とも「不登校相当」の者（「4、5、6年経験あり」群）が最も多く、17.1%、次いで、6年時のみ「不登校相当」（「6年経験あり」群）が12.6%、5～6年時の「不登校相当」（5、6年経験あり）群が11.7%と続いている。この3グループで「経験あり」群の8割（全体の4割）を占めており、中1時の不登校生徒の半数を占める「経験あり」群の圧倒的多数は、小6時点での「不登校相当」の児童であったことが分かる。

## 中1不登校生徒調査

国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、中学校1年生時における不登校の急増の背景を探り、今後の対応についての検討を行うための基礎資料を収集するため、114市町村にある公立の全中学校に在籍する生徒のうち、不登校を理由として30日以上欠席をした平成13年度の1年生全員（1,633名）を対象に調査、分析を行い、その結果を「中1不登校生徒調査（中間報告）[平成14年12月実施分]—不登校の未然防止に取り組むために—」（平成15年8月）及び「不登校の未然防止に取り組むために—中1不登校調査から分かったこと—」（平成16年3月）などに取りまとめています。

これらの資料は、<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/3.htm> から入手ができます。

「Ladder」は学校間の接続を図る「はしご」を意味しています。